

第1節 東淀川区地域の特性

1 東淀川区の概況

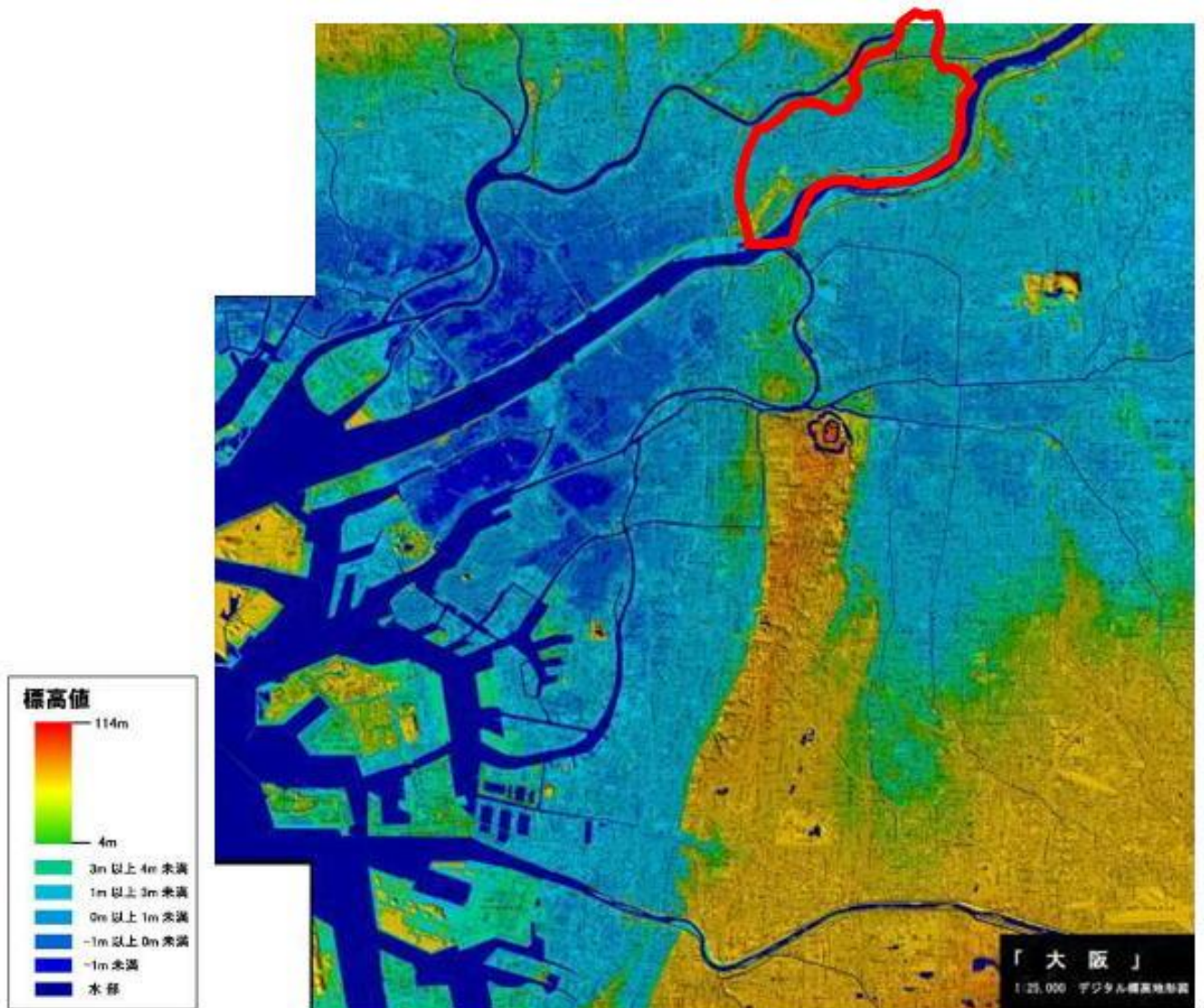
東淀川区(以下「本地域」という)は淀川の下流に位置し、神崎川と淀川に挟まれた平野の地形である。

標高は、海拔1m～5mと低く、北東部で4m～5m、中部は1m～2m、南西部で1m～4mなどとなっている。

全体が、淀川の氾濫により形成された沖積層で泥・砂・礫などよりなる地盤で、未固結の軟弱な堆積層が表層に広がっている。

人口は約17万人で、約9万世帯が暮らしており、平均世帯人員は1.9人/世帯で、人口密度は130人/haと高密度な市街地を形成している。

土地利用では、低層住宅を主体とし、北部や西部などには中高層住宅が多くみられる。幹線道路沿いや、駅前などには商業・業務施設が多く、河川沿いなどには工業施設が立地している。

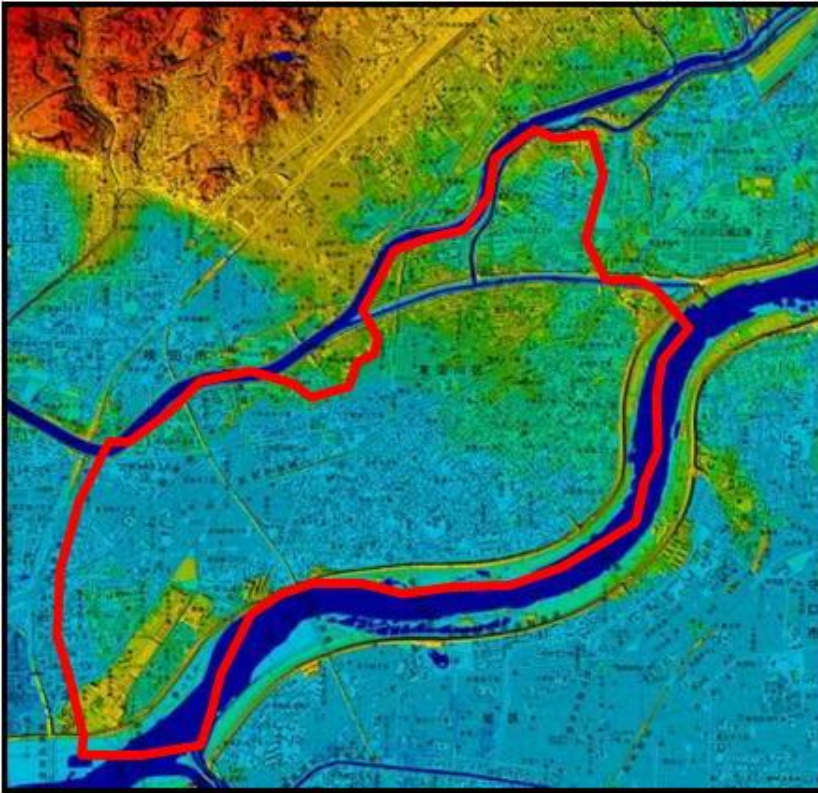


資料) 国土地理院

2 自然環境特性

(1) 地形概況

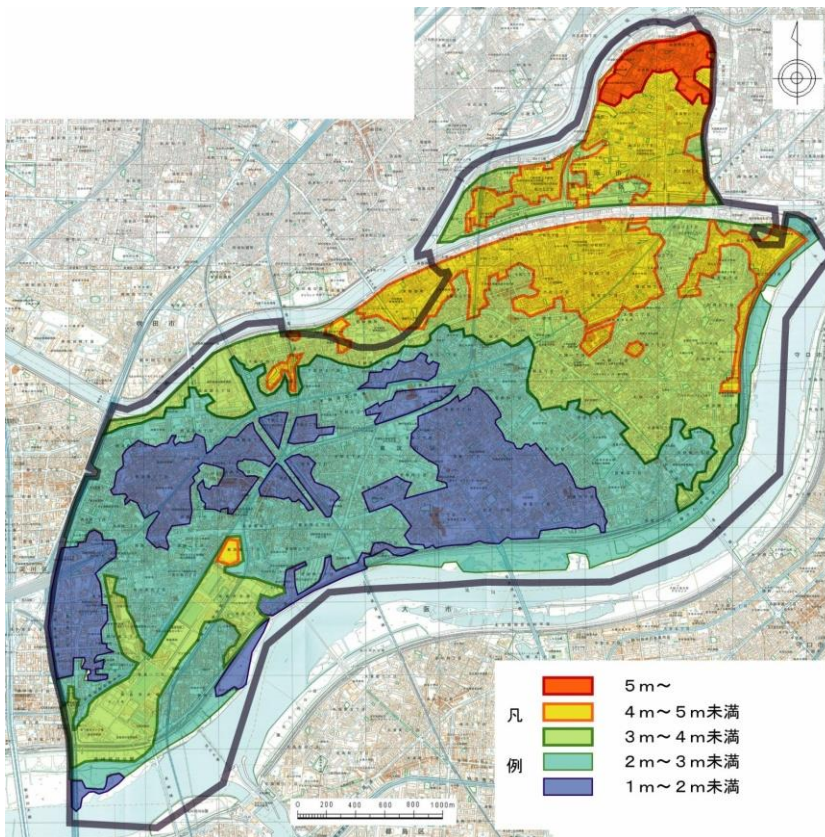
図 地盤高図



資料) 国土地理院

(2) 地盤高

図 地盤高図



作図) (株) ランドシステム研究所、岡本 茂

本地域の地形は、北部で海拔5m、中部～南部で1m前後の低平な、淀川下流部に開けた平野の地形である。

北部は、淀川等の堆積作用による、わずかに地盤高の高い微高地と呼ばれる土砂が堆積した地形(自然堤防や砂丘など)がみられる。

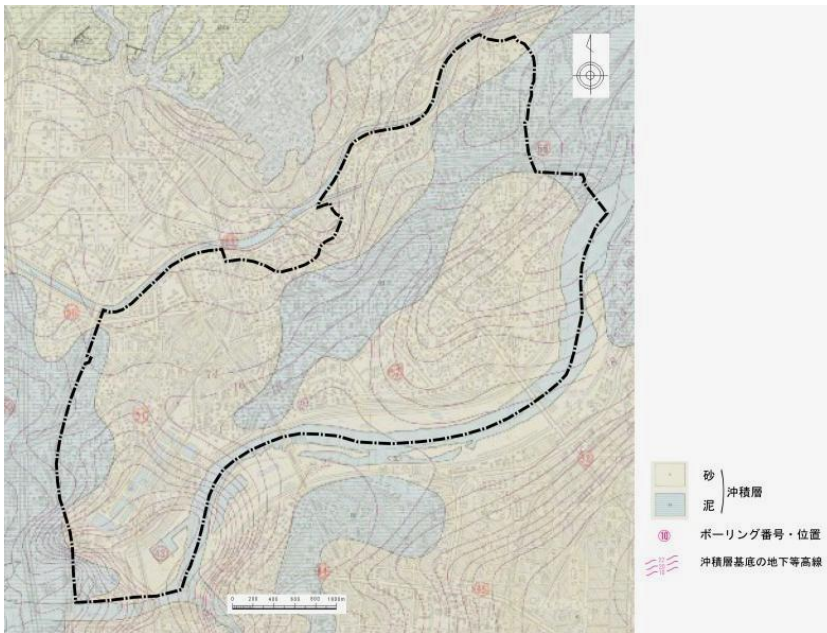
本地域の地盤高は、国土地理院によれば、海拔1m～5mまでみられる。淀川堤防などの人工地形の一部では海拔8m前後の箇所がみられるが、平野部の一般自然地形では全体として平坦な土地であり、北部に高く南に向かってわずかに標高が低下する地形となっている。

中央部から西部にかけては、海拔1m～2mの低平な地形が広がっており、この地形は、河川の氾濫が過去からたびたび繰り返されて形成された、氾濫原の地形であることを示している。

北部のわずかに標高の高い地形は、自然堤防とよばれる氾濫原よりわずかに高い微高地(びこうち)や、かつての海岸線であった頃の海岸付近の堆積物である砂堆(さたい)や砂州(さす)とよばれる砂質の土地である。

(3) 地盤

図 表層地質図



資料) 国土交通省

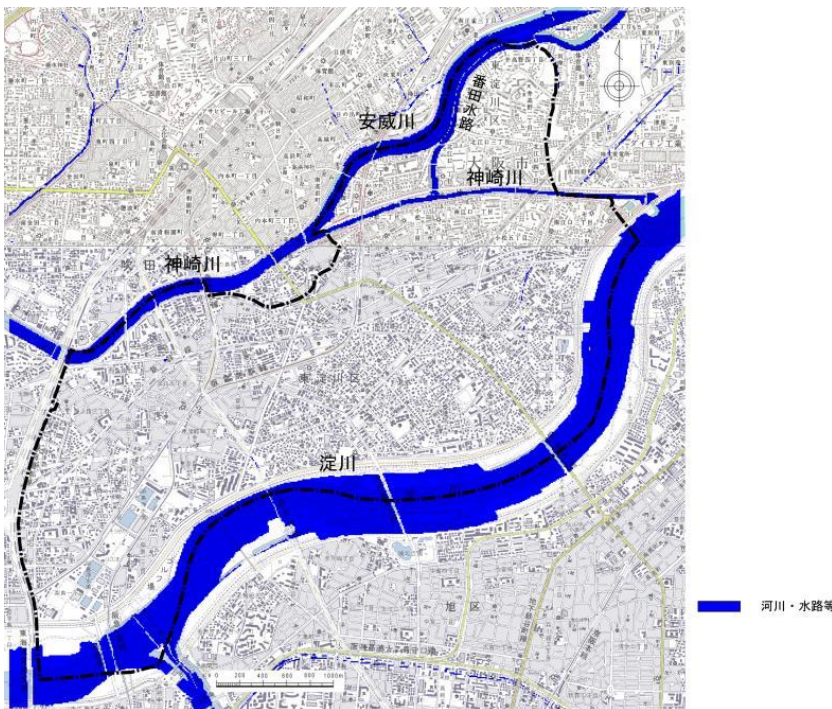
本地域の地盤は、表層地質図に示されるように、淀川などの河川により運搬された砂や泥などが堆積した沖積層が表層部に厚く堆積している。この地層は未固結であり、地盤は軟弱で地震時などには特に揺れやすい。

沖積層の下部には、洪積層と呼ばれる、よく締まった砂礫を主体とする地層が堆積し、本地域の地盤の基盤ともいえる、地耐力のある地層が分布する。本地域の中高層建築物の建築基礎は、一般にこの天満砂礫層を支持層として建設されている。

天満砂礫層のさらに地下深部には花崗岩などの岩盤が分布し、大阪平野の基盤となっている。

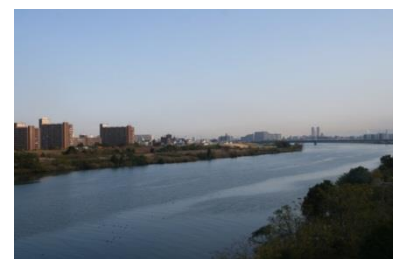
(4) 河川

図 河川図



資料) 国土地理院

本地域は、東に淀川が南に流れ、西側を神崎川・安威川などが流れ、河川に面した土地である。明治時代以前には、新淀川はなく、(旧)中津川が蛇行しながら、現在の大川に注いでいた。明治後期に、新淀川の開削が完成し、北大阪地域の治水安全性が向上したが、河川に挟まれた本地域は、現在においても水害の危険性があるといえる。



淀川



神崎川